

目的 米沢織物の産地としての特色は、原反売り、即ち繊維品から次第に二次製品や和装製品、即ち衣料品という既製品が増加しているのがみられ、その縫製技術は韓国に依存しているものもみられる現状である。今まで家庭で行われた技術が何故業者に移ったのか、1報ではその要因を社会、機屋、消費者側からみて考察した。2報ではその一例として茶羽織をあげ、その既製品化のプロセスの中に既製品化の契機をみてきた。本報は小中物の一買縫商が米沢に始めて縫製会社を設立する迄の歴史の中から、販売繊維品を取りあげ、米織既製品の史的变化を業者側から考究するのが目的である。

方法 米織買縫商D家の昭和25～35年における販売商品資料、並びに米沢織物工業協同組合の調査報告より考察。

結果 買縫商から縫製会社に移行した会社の資料から、特に繊維品の品種と模様の推移を主体として考察した。1 既製品化傾向を迎えるこの期の米織生産品の原材料別反産額は、合織49% 人絹26% 絹13.2% となり、人絹、スフ時代から合織時代に入り、端布、流行おくれ、売れ残り品、見切り品などの再移用から、原反を裁断し製造する方式の変化に対応する材料が出現し、更に合織メーカーの開発意欲とシステム化が出来たこと、2 模様も緋38%、縫取お召18%、米沢黄ハ5.1% が流行し、日常生活が加速化し、多様化した衣服が消耗品化する傾向に合致した。誰にも似合うお洒落風なものが出来たので、過去の「分に恥じた」衣服意識を変え、既製品化を誘導し、コート、アンサンブル、茶羽織、丹前、祥天などが先ず既製品化されたと考えられる。